



阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター

資料室 ニュース



Vol.45
2011年11月
発行

特集 震災資料収集・保存事業を振り返る

震災資料とは？

人と防災未来センター資料室は、センターが開設した2002年以降「震災資料」の保存・収集を行ってきました。それでは「震災資料」とはいったい何なのでしょう。資料室では阪神・淡路大震災の被害を記録したもの、震災からの復興を記録したものを総称して「震災資料」と呼んでいます。

震災資料収集は、阪神・淡路大震災発生直後から始められました。その後(財)21世紀ひようご創造協会、(財)阪神・淡路大震災記念協会などが事業として資料収集を行うようになります。

その中で2000年より2年間をかけて兵庫県が震災資料の大規模収集事業を行いました。これには延べ450人の調査員、約6億7,800万円の予算が投入され約16万点の資料が収集されました。この資料が現在資料室所蔵資料の中核を成しています。

それでは、具体的にはどのようなものが震災資料なのでしょう。右の写真のように、地震の衝撃で歪んだ側溝の蓋、焼けて溶けた硬貨などはもちろん震災資料です。しかし、震災資料とはこのように震災の被害の大きさを見た目で伝えるモノや写真だけではありません。



震災によって折れ曲がった側溝の蓋
(2200354-000002)



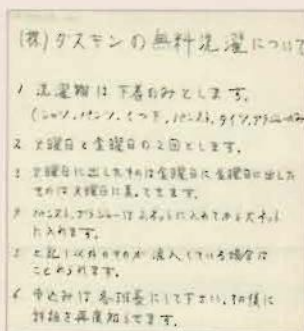
焼けて溶けた硬貨(4700349-001002)

こんなものも震災資料です

震災によって、生活基盤に大きな被害が出ましたがその中でも被災者は生活をしなければならませんでした。震災資料には被災者に対する様々な救援を記した資料や、ときには救援物資そのものも含まれています。また、一口で救援といってもその内容はいろいろです。資料室には例えば外国人向けに多言語で放送されたラジオ番組のテープなども所蔵されています。

また、その生活の場は避難所や仮設住宅にも及びました。資料室にはそこでのボランティア日誌、被災者自身の日記、メモ、音声テープ、ビデオテープなどが大量に含まれており、そこでどのような問題が発生したのか今日でも具体的に知ることができます。

震災資料は震災直後のものだけではなく、震災後の生活の再建にはさまざまな困難が立ちはだかりました。震災記録にはこうした困難の克服の記録も含まれます。こうした問題にはまちづくりやマンション再建問題などのように今日でも未解決の問題が含まれます。その意味で、震災資料は震災から15年以上経過した今日に至っても連綿と作り続けられていると言ってよいでしょう。資料室ではこうした記録の収集を現在でも続けています。



▲震災直後、無料で洗濯サービスを周知するチラシと、実際に避難所に配布されたビール瓶に詰められた水
(2-001033、439-001001)



マンション再建関係の資料



◀避難所におけるボランティア日誌
(2-001033、439-001001)

震災資料の活用

震災の被害、もしくは復興の状況を記録した資料、それを示すモノ、音声テープ、ビデオテープなどは現在では総計約17万8千点に及びます。それではセンター開設以後、これらの資料はどのように活用されてきたのでしょうか。一番利用が多いのはやはり写真資料です。写真は一目で地震の恐ろしさ、すさまじさを伝えることができることから、新聞や自治体をはじめとする多くのPR誌で防災の啓発目的で活用されてきました。

しかし、資料室が所蔵する資料の活用はそれだけではありません。

モノ資料は他機関での展示にも多く使われます。また紙資料を中心として小学生の自由研究や大学生の卒業論文の題材として用いられることも多くあります。自然科学、社会科学をはじめとする研究者によって、資料をより深く読みとく試みも多くなされています。こうした研究者の活動によって、阪神・淡路大震災の経験を広く共有することが可能となっています。

さらに西宮市や伊丹市をはじめとする自治体史編纂にも活用され、広く一般にもその知識が還元されています。



写真資料の一例



他機関での人と防災未来センター所蔵資料の展示風景。
左は伊丹市立博物館、右は関西大学安全ミュージアム。



震災資料の内訳 (10月31日現在)

紙資料	169,218点
モノ資料	1,420点
映像・音声資料	1,157点
写真資料	5,892点 (125,728枚)
総計	177,687点

資料室が所蔵している資料は、以下のURLでインターネット上で検索することができます。是非ご利用下さい。
<http://lib.dri.ne.jp/search/index.asp>

震災資料収集事業の課題

以上のように、人と防災未来センターには震災直後から収集された多くの貴重な資料が保存されています。しかし、今後震災資料の収集・保存・活用を行っていく上でまだまだ多くの課題があります。そのうちのひとつが「別途協議」資料の存在です。

「別途協議」資料とは利用者の方に資料を提供する際にもととの所蔵者の同意を必要とする資料群のことで、この数は4万6千点に上ります。資料の寄贈を受ける上で、個人情報等の利用には細心の注意を払う必要がありますので、このような寄贈者の意向に配慮することは当然です。

ただし、震災からまもなく17年が経過しようとしており、寄贈者との連絡が取りにくくなってしまっていることが大きな問題です。中にはすでに転居されており連絡先不明となっている「別途協議」資料もあります。このままでは多くの資料が死蔵されることにもなりかねません。

このため、新たに寄贈を受ける際には「別途協議」が必要な期間を寄贈から15年、もしくは30年などと期限を切って資料をできるだけ公開していくことが、資料の持つ貴重で多様な価値を後世に伝えていく上で必要であろうと考えています。

資料寄贈の お願い

人と防災未来センター資料室の資料は、すべて市民の皆様、団体・企業からのご寄贈によって成り立っています。震災の記録のみならず、復興・救援・文化活動等の記録・写真、テープ類などは例えメモ1枚、チラシ1枚であっても貴重な震災資料です。もし処分などご検討されていましたら、人と防災未来センター資料室が責任をもって保存・活用させていただきますので下記の連絡先まで、ぜひご一報下さい。

TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

資料室企画展 「兵庫と水害」を 開催しました

2011年12月4日(日)まで、人と防災未来センター西館2階で企画展を開催しました。

展示風景▶



① 明治4年高潮被害



② はげ山となった六甲山明治期



③ 明治29年湊川水害



④ 室戸台風(昭和9年)

2004年の台風23号、2009年の台風9号は兵庫県に大きな被害をもたらしたことは記憶に新しいところです。技術が進歩した現代でもこのような状況なのですから、昔はもっと頻繁に大きな水害が兵庫県を襲っていました。兵庫県の発展の歴史は、水害との戦いの歴史でもあったのです。今回の企画展ではこうした水害との苦闘を振り返ることを目的としたものです。

展示の内容

兵庫県は、開港に伴って急激に発展しました。人が急激に集住したこともあって山林の伐採が進み、豪雨や台風によってたびたび水害に見舞われました。人々の生活は常に水害の発生に脅かされ続けていたと言えるでしょう。

いつの時代も水害のたびに、懸命な復旧作業が行われ、被災地外からの救援活動が行われるのは現在と同じです。ただし、これらの作業や活動はその時代時代によってその姿を大きく変えます。

たとえば、戦時時期には救援は動員という形で行われますし、戦後復興期には都市の再生の一環として復旧が行われるのです。

今回の企画展では、このような時代背景にも注目しつつ、人々や行政、団体などの被災状況、救援活動、そして復旧作業や再発防止措置の状況などを展示しました。

来館者の感想より

- 😊 阪神地区でも過去に大きな水害があるとは知りませんでした。
- 😊 震災以前からも水害とたたかってきた兵庫。人の生きる力を感じました。
- 😊 水の大切さと共に恐ろしさも知りました。
- 😊 災害というのは決して特別なことではなくいつおきてもおかしくないと思った。

写真
提供

①③神戸市立博物館、②⑧⑨兵庫県治山林道協会、④⑤人と防災未来センター所蔵、
⑥尼崎市立地域研究史料館、⑦米田定蔵氏



⑤ 阪神大水害(昭和13年)



⑥ ジェーン台風(昭和25年)



⑦ 昭和42年水害



⑧ 砂防ダム(昭和43年ごろ)



⑨ 平成16年台風23号

開催記録

10月15日、資料室主催、大阪歴史学会近代史部会、大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会、神戸史学会、日本史研究会近現代史部会と共催で公開研究会「阪神間の都市形成と水害・戦前編」を開催しました。報告者として資料室の震災資料専門員が務めたほか、外部から吉原大志氏(日本学術振興会特別研究員)を招き、またコメンテーターとして島田克彦氏(桃山学院大学准教授)にもご参加いただきました。

この研究会は明治29年水害や室戸台風といった戦前を題材としたものでしたが、災害が「特殊」な状態ではなく常に起こり続けてきたものであり、その結果阪神間の都市形成にも大きな影響を与え続けてきたことが報告されました。

報告終了後の討論ではフロアからも積極的な発言があり、広く一般的に災害を研究するときの視点や方法、災害の展示方法などにまで踏み込んだ議論が交わされました。



東日本大震災関連雑誌を収集、開架しています。

資料室では、2011年3月から5月の間に発行された、東日本大震災関連記事を掲載している週刊誌類を収集、開架しています。

経済専門週刊誌や女性週刊誌なども収集しており、震災に関してどのような問題が取り上げられ、報じられてきたのかの変遷を見て取れます。また、東日本大震災関連の写真集や新聞縮刷版も収集しています。

ご自由にご覧いただけますので、ぜひご利用ください。

新着資料紹介

関東大震災の手記 三代で体験した「震災」

2011年9月1日防災の日に、森下博さんが資料の寄贈のため、資料室を訪問してくださいました。寄贈された資料は、博さんのお父様、森下清吉さんが書かれた関東大震災の手記です。寄贈者の森下博さんは、阪神・淡路大震災当時、神戸市に住んでいらっしゃいました。自宅は一部損壊の被害を受け、現在も同じ場所に住居を構えていらっしゃいます。資料室を訪問される前日に、ようやく震災で損壊した家の修理が終わったそうです。

なぜいま、関東大震災の手記を寄贈されるのか。その理由を博さんはこのように教えて下さいました。博さんの甥たち(清吉さんの孫)は、現在、関東に住んでいます。2011年3月11日の東日本大震災のときには、清吉さんの後を継いだ甥は会社に泊まり込み、放射線技師をしている甥は、駒沢の病院から大塚まで4時間かけて帰宅したそうです。帰宅難民となった彼らの話を聞いたとき、博さんは父である清吉さんが関東大震災で帰宅難民となったことを手記に残していたことを思い出したそうです。三代にわたって被災した経験が何かの役に立てばと思い、清吉さんの手記を寄贈しようと思ったそうです。寄贈した手記には、関東大震災のあった1923年9月1日に横浜に集金にでかけ、そこで被災した清吉さんが、3日かけて東京へ戻る様子が詳細に描かれています。寄贈者の博さんは「震災が起きたときは状況判断が難しい。父の手記を読むと、日頃から自衛することの大切さに気づかされる」とおっしゃっていました。

88年前の「帰宅難民」の体験記は、今の震災に通じる教訓を伝えています。



今回寄贈された手記



資料室所蔵の関東大震災の被害を写した写真

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30~17:30(展示スペースとは時間が異なりますので、ご注意下さい)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日~1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます